



# 酒田の明治時代

文明開化のおもいで

開催期間 平成30年6月16日～8月27日

## 戊辰戦争敗戦から始まる庄内の明治時代

明治元年(1868)、戊辰戦争は幕府軍の敗北で終わり、酒田亀ヶ崎城には新政府の拠点「民政局」が置かれました。明治4年(1871)には「廃藩置県」の令が出され、庄内は酒田県、大泉県、鶴岡県と頻繁に名称が変わり、明治9年(1876)に現在の「山形県」が誕生します。

戊辰戦争での敗北により、庄内藩主酒井家の転封及び減石が心配されましたが、西郷隆盛の計らいや、本間家をはじめとした領民が新政府へ献納金を出したこともあり、5万石の減石はありましたが、藩主の座は安堵となりました。しかし、庄内の人々は戦争中の軍資金集めや戦後処理のための税金に加え、明治2年(1869)の大凶作により、厳しい生活を送っていました。

## 重税反対！ 天狗騒動

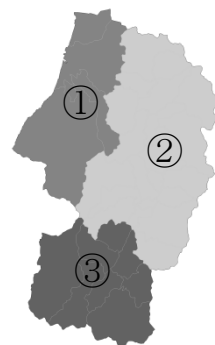
新政府の厳しい政治の中、苦しい生活を送る農民たちは、明治2年(1869)、酒田県庁に嘆願書を提出します。その内容は「戊辰戦争で負担したお金を返してほしい」「重すぎる雑税を軽くしてほしい」といったものです。しかし、県との交渉はうまく進みませんでした。

減税運動は過激化し、彼らは「天狗党」を名乗り、打ちこわしを起こすようになりました。これが庄内を揺るがした農民運動「天狗騒動」です。

騒動を抑えきれなかった第一次酒田県知事・大原重美は免官。酒田県は山形と合併させられ、第一次山形県となります。しかし、それでも騒動は収まりません。そこで白羽の矢が立ったのが、強い影響力を持つ旧庄内藩です。

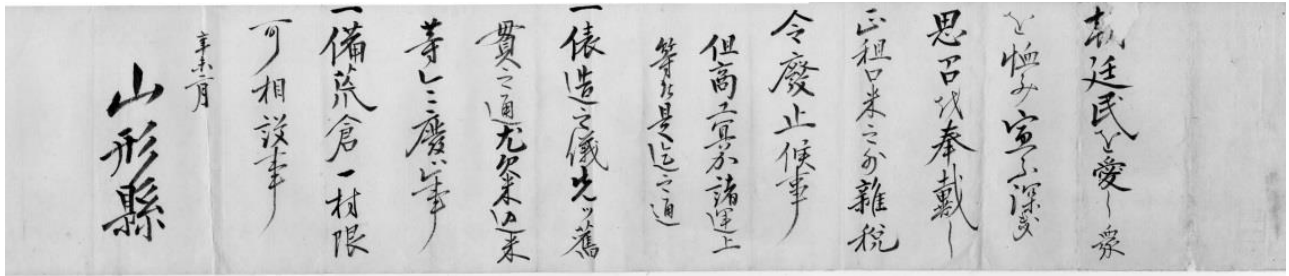
新政府の重鎮・西郷隆盛と交流を持っていた旧庄内藩は、旧幕府軍であったにもかかわらず、家老などの上級藩士らが、そのまま大泉県(鶴岡)の重役となるのが許されていました。明治4年(1871)に誕生した第二次酒田県では、現在の県知事に当たる「参事」に松平親懐(元家老)、副知事に当たる「権参事」に菅実秀(元中老)が任命されます。

明治5年(1872)、酒田県により天狗騒動は力づくで弾圧され、一時的に騒動は静まります。しかし、こうした強権的なやり方を、農民・商人たちはもちろん、一部の士族はよく思いませんでした。



上図…明治4年の廃藩置県後の山形。

①が酒田県、②が山形県、③が置賜県。



### 坊城知事による雑税免除の布達 明治4年(1871)1月布達

第一次酒田県(大原重実知事)ののち、第一次山形県(坊城俊章知事)が成立します。坊城知事は、政府の強硬なやり方では庄内の政治がうまくいかないと考え、独断で雑税を免除することを決定しました。展示資料は明治4年2月に村々に送られた書状と思われる。

当然、政府を無視して勝手に税制を変えることは認められず、この布達は即座に撤回されます。そのため、政府に対する反発を生み、沈静化していた民衆運動が再び激化し、ワッパ騒動発生の一因になりました。

## ワッパ騒動の発展

明治5年(1872)、政府は年貢米の代わりに金銭を納める「金納」を許可します。しかし、米価高騰のなか、第二次酒田県は従来のまま米で納めさせ、その売り上げから大きな利益を得ていました。

これを知った農民たちは、納め過ぎた税金の返還を求め運動を始めます。この明治期庄内の大事件は、ワッパ弁当一杯分の過納金が戻ってくると農民たちが騒ぎ立てたことから「ワッパ騒動」と名付けられました。騒動の指導者・金井質直(ただなお)は農民に支持され、自宅は「金井県」とも言われました。

運動の結果、内務省から役人が派遣され、金納が認められます。しかし、過納金の返還要求は続き、不正を働いた村役人の追及も行われ、火のついた騒動は収まりません。県と激しく衝突した結果、明治7年(1874)、ついに金井は逮捕されてしまいます。

同じ頃、酒田の森藤右衛門は上京し、県政の横暴を訴える「建白書」を、元老院や司法省に提出する運動を始めます。明治7年12月、三島通庸が酒田県令となり騒動の鎮圧に動きませんが、中央に出向き抗議活動を行う森らを抑えることはできませんでした。自由民権運動が注目された当時、圧政を訴える森の行動はさまざまな新聞で報じられ、評価されました。

裁判の末、明治11年(1878)に過納金の一部が農民たちに返還されます。これはワッパ一杯には及ばない金額でしたが、農民が一部勝訴した珍しい事例です。森藤右衛門はこののち、山形を代表する自由民権運動活動家として活躍します。



左：森藤右衛門

天保13年(1842)～明治18年(1885)  
酒田三十六人衆「唐仁屋」の次男として誕生。ワッパ騒動では指導者として活動し、明治13年(1880)に庄内初の政治結社「尽性社」を創設、同14年(1881)には新聞「両羽新報」を発刊します。県会議員在職中、44歳の若さで死去。

右：三島通庸

天保6年(1835)～明治21年(1888)  
薩摩藩出身の新政府官僚。明治7年(1874)から酒田県令となり、その厳しさから「鬼」と呼ばれました。激化していたワッパ騒動を、森藤右衛門らから批判を受けながらも鎮圧。土木工事に力を注ぎ、山形の近代化に大きく貢献しました。明治15年(1882)に福島県令となり、18年(1885)に警視総監となります。

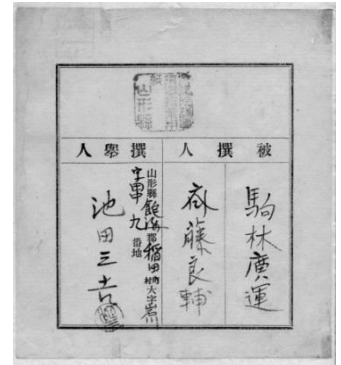
※明治8年に鶴岡県令となり、9年には山形県・鶴岡県・置賜県の3県が合併し現在の山形県が誕生。三島は初代山形県令となります。

## 国民も政治に参加！

明治23年(1890)7月、前年に公布された大日本帝国憲法のもと、初の帝国議会総選挙が行われました。この選挙では衆議院議員200名が選ばれました。日本は近代的立憲国家として歩み始めたのです。

第一回選挙の庄内地域(山形3区)当選者は駒林広運(政治家)・鳥海時雨郎(元県会議員)、2年後の第二回選挙では本間耕曹(元警視)・斎藤良輔(元県会議員)が当選しています。明治25年(1892)11月29日には初の帝国議会が開かれましたが、何もかもが初めてのため、発言の手順や座席順は手探り状態で決定されました。

当時、投票権は「国税15円以上を納付する、満25歳以上の男子」にしか与えられませんでした。これは日本の人口のわずか1.14%です。貧困層の割合が大きい東京では、市民1,000人に対し、投票権があったのはわずか4人のみです。



大日本帝国議会衆議院議員選挙投票用紙  
明治23年(1890)～37年(1904)頃  
候補者名から、選挙制度開始から間もない頃に利用された投票用紙と思われます。投票の際は、用紙に候補者名・自分の住所・姓名を書いて捺印し、さらに封をして、立会人が見守る中で投函しました。

## 徴兵令と西南戦争

政府は「徴兵令」を明治6年(1873)に布告・実施し、満20歳以上の健康な男子は、身分に関係なく7年間※1の兵役義務が課されました。この制度により特権を失ったのは士族です。徴兵制に加え秩禄処分※2が行われ、下級～中級士族は次々に没落していきました。このやり方に不満を持つ士族たちは、明治10年(1877)、西郷隆盛を指導者とした反乱・西南戦争を起こします。しかし、この反乱は、近代装備と訓練された兵を持つ政府軍に鎮圧され、西郷は自決しました。徴兵令が効果を発揮したのです。

徴兵令は明治12年(1879)に大幅に改正され、兵役義務は10年に延び、免役の基準は引き上げられます。兵役を嫌がり逃げること(徴兵忌避)が無いよう、厳しく管理されました。

※1：常備軍3年、後備軍4年の兵役。

※2：禄(給料)を政府に返納させ、数年分の給料を証書や現金で支給し廃止したこと。



錦絵『西南鎮静凱旋之図』明治10年(1877)以降  
西南戦争を鎮圧し、凱旋する政府軍を描いた錦絵です。本来は3枚続きですが左側1枚が欠損しています。中央に大きく描かれているのは、総司令・有栖川宮熾仁親王。右側に山縣有朋、黒田清隆らが続きます。

政府軍は最新の兵器、訓練された兵士を備え、兵力に劣る反乱士族を圧倒したのです。

## 日清・日露戦争

明治政府は「富国強兵」を進め、軍事力を強化させていきました。明治27年(1894)、朝鮮の統治を巡って清国と対立していた日本は宣戦を布告、日清戦争が勃発します。日本は、当時の国家予算の2倍以上にあたる約2億円を費やし、清国に勝利します。

しかし、遼東半島(満州)の所有権を巡り、日本はロシアと対立を深めます。満州に駐屯するロシア軍に危機感を抱く日本は、交渉の影で開戦準備を進めました。ロシアとの交渉は決裂し、明治37年(1904)に日露戦争が勃発します。アメリカとイギリスから支援を受けた日本は戦局を有利に進め、明治38年(1905)初頭には旅順・奉天を占領。日本海海戦に勝利し、超大国ロシアを破ります。清、ロシアを破った日本は、列強各国に注目され、世界の表舞台に台頭したのです。

日清戦争では県内の出征者が4千人を超え、飽海郡内からは約830人が出征しました。しかし、明治27年に庄内地震が発生し、酒田町は地震対応に追われます。戦時中のため国からの援助は少なく、戦後は増税も行われたため、酒田の経済状況は厳しいものとなりました。日露戦争では飽海郡内から1,966人が出征し、144人が戦死・戦病死しています。軍に対しては米や食品類、日用品や金銭の献納も行われました。戦争は人々に大きな負担をかけましたが、日露戦争後の酒田には帰還兵を迎える凱旋門があちこちに建てられ、町中が祝賀ムードに湧きました。



本町通りに建てられた凱旋門  
明治38年(1905)頃撮影

日露戦争から戻った兵士を出迎える凱旋門は、酒田のあちこちに作られ、写真の凱旋門は現在の市役所前に建てられたものです。国旗を持った人々が、帰還兵がやってくるのを待っています。

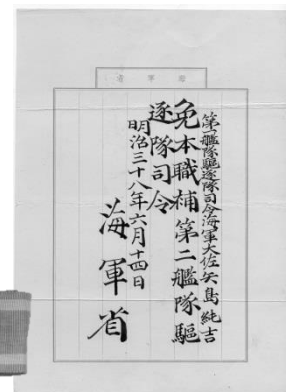
## 第二駆逐艦隊司令として参戦 矢島純吉 慶応元年(1865)～大正13年(1924)



海軍軍人・矢島純吉は、酒田に生まれ、のちに鶴渡川原村の教育者・矢島晁英の養子となります。『飽海郡誌』を著した郷土史家・斎藤美澄は兄に当たります。

庄内中学を卒業後は海軍兵学校に入学し、明治21年に海軍少尉に任官。日清戦争では水雷艇隊長として活躍。明治38年に大佐となり、日露戦争に第二駆逐艦隊司令として旅順港戦に参加しました。戦後は戦艦安芸・壱岐の艦長も歴任し、大正4年に海軍中将となりました。

第二駆逐艦隊司令を任ずる  
海軍からの令状(明治38年)と  
戦後に贈与された金鵄勲章



## 災害が続いた明治時代

明治の酒田は頻繁に災害に襲われました。最上川は何度も氾濫して家や田畑を押し流し、地震は町の中心部を焼きつくし、経済の衰退を招いてしまいます。

最上川は現在とは流れが違い、大きく蛇行していました。洪水が起きる度に流域集落は被害を受け、家の再建・移転を余儀なくされていました。酒田港も堤が破壊されるなどの被害を受け、川の治水は長年の課題だったのです。明治17年(1884)に政府によって測量が行われ、翌年から技師・石井虎治郎が監督して最上川治水工事及び酒田港修繕工事が行われます。治水工事は明治42年(1909)頃まで続けられ、現在の川の流れが造られました。

工事が進んでいた明治27年(1894)、庄内地震が発生。酒田町や周辺地域は家屋倒壊・大規模火災に襲われます。船場町、今町といった酒田の商業地・繁華街が被害の中心となり、酒田の産業界は大きなダメージを受けました。

鉄道に物流機能を奪われ、災害によって甚大な被害を受けた酒田港にとって、明治期は苦難の時代だったのです。



庄内地震により破壊された船場町  
明治27年(1894)撮影

## 町の振興に動いた酒田の人々

明治後期、商人たちは積極的に酒田振興に動きます。彼らは、衰退した酒田港を復活させるには、「鉄道誘致」が重要と考えました。明治42年(1909)、北海道からの帰路で立ち寄った鉄道院総裁・後藤新平を、酒田の有力者たちは熱烈に歓迎します。酒田～新庄間の鉄道敷設がいかにも有望かを強くアピールし、後藤から「工事はもうすぐ始まるだろう」という言葉を聞き出しました。

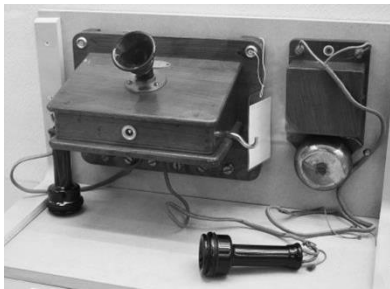
こうした酒田の人々の強いアピールが実り、大正3年(1914)には酒田駅が開業し、念願の新庄～酒田路線が開通します。翌年には最上川駅(酒田港駅)が開業。港と駅がつながり、輸送の利便性が向上します。さらに大正13年(1924)には羽越線も全線開通します。また、国営で最上川治水工事が行われることが決まり、酒田港も整備されることになりました。近代化から取り残されていた酒田港ですが、明治の人々の努力の甲斐あり、大正期から昭和期にかけて、貿易港として発展していきます。



蒸気機関車が描かれた引き札  
明治35年(1902)以降

商店の得意先に配られたチラシで、酒田の人々が待ち望んでいた蒸気機関車が描かれています。鉄道工事が始まった明治後期に配られたのでしょうか。

## 電信・郵便・電話の始まり



最初の実用電話機  
「ガワーベル電話機」  
明治23年(1890)

酒田の官営電話開通より早く、酒田の商家・鑑屋ではすばやい連絡が取れるように、自宅と米穀取引所をこの電話機で結びました。

日本で初めて使われた実用機で、イギリスのガワー、アメリカのベルが発明した通信技術を組み合わせて、ガワーベルという名前がつけました。鑑屋が使ったこの電話機は東北最古のものと言われています。

政府は明治4年(1871)から欧米の「郵便」を取り入れ、翌5年(1872)には北海道を除く全国で事業を始めました。

酒田での取扱量は、最初の一か月では引受43通・配達23通と、わずかな量でした。それでも次第に郵便は浸透し、私製絵はがきの使用が許可されると絵はがきブームが到来。酒田でも写真絵はがきが大量に作られ、今では当時の風景を伝える重要な資料になっています。

明治初期の日本には、緊急連絡用としていち早く「電信」が敷かれます。山形では明治天皇の東北行幸に合わせて工事が行われ、明治12年(1879)に酒田に電信分局が開局しました。電信によって、地方と都市部が即座に連絡しあえるようになったのです。また明治25年(1892)、酒田に初めて「電話」が登場します。これは鑑屋が米穀取引所とやりとりするために個人で設置した電話機で、当時は非常に珍しいものでした。酒田で官営電話事業が始まったのは明治41年(1908)なので、15年ほど先取りしていたこととなります。

## ランプから電気へ

幕末期から日本に登場した、石油で灯る「ランプ」は、夜の室内をぐっと明るくしました。初めて石油を酒田に持ち込んだのは酒田の商人・中村太助で、明治7年頃(1874)には本間家でランプを使用していた記録があります。これは東北の地方都市ではかなり早い導入で、当時の人には珍しいものに映ったことでしょう。

明治14年(1881)、明治天皇が酒田を巡幸します。宿泊先の渡辺作左衛門宅前(現在は本町公園となっている)にはランプの街灯が取り付けられ、それを見た酒田商人がこぞって真似をしたといわれます。明治28年(1895)に造られた酒田灯台の、最初の光源もランプです。

しかし、明治27年(1894)10月22日、午後5時半過ぎに起きた庄内地震では、夕食時だったことに加えて、ランプを使用していた家庭が多かったために、大規模な火災が発生してしまいます。

「電気(電灯)」が日本に初めて登場したのは明治15年(1882)でしたが、酒田で電気事業が始まるまでには、かなりの時間を要しました。明治後期の酒田では、町外にある発電所から電気を買うか、新たに発電所を設置するか、議論が起きました。その結果、新たに日向村升田(旧八幡町)に酒田町営電気第一発電所が建設されます。日本に初めて電気が灯った日から26年後の明治41年(1908)、ようやく酒田でも電気事業がスタートしました。



石油ランプ  
明治期

## 学校の誕生

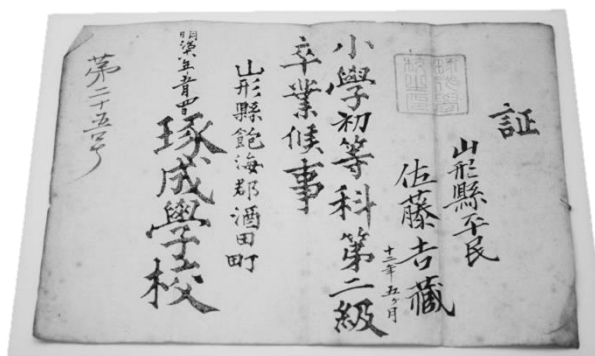
江戸期の藩校・寺子屋では、城下町鶴岡では「儒学」「国学」を軸に教育が行われ、商人町の酒田では計算や読み書きなどの実用的な教育が行われていました。「学校」が登場するのは明治時代になってからです。

酒田初の学校は、明治2年（1869）天正寺につくられた「学而館」です。戊辰戦争後に酒田の統治に当たった民政局長官・西岡周碩が設立し、詩文や習字を約百名の生徒に教えていました。しかし、熱心に活動していた西岡が去ると、教育の質が落ちてしまいます。そして「学校規則改正につき、当分止められ候事」という酒田県からの通達によって、わずか1年5ヵ月で閉校しました。学而館は短命で終わりましたが、酒田の学校教育の祖となりました。

明治5年（1872）8月、「学制」が發布され、全国各地に小学校、師範学校が設立されることになりました。酒田と周辺地域にも学校が続々と設立され、明治8年（1875）にそれら小規模学校を合併して鳴鶴学校が新設、明治12年（1879）、鳴鶴学校を母体に、琢成学校が開校します。

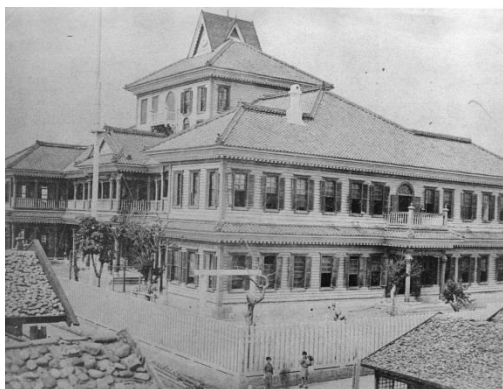


明治時代の教科書（国語）



琢成学校 卒業証書

## 2度の炎上！琢成学校



明治12年（1879）に秋田町に建てられた琢成学校は、当時山形県内でも最大規模の学校で、木造3階建て、生徒数は最も多い時で1,300人を超えました。酒田中学（酒田東高校の前身）も併設し、鶴岡の文学者・高山樗牛もここで学びました。

しかし、明治16年（1883）に起きた火事で類焼、再建した校舎も明治20年（1887）に火事で全焼してしまいます。この写真の校舎が利用されたのは、わずか4年間でした。 左写真：琢成学校（明治12年以降撮影）

明治21年（1888）、酒田高等尋常小学校と改称し、泉流寺の畑地に再建されましたが、6年後の庄内地震によって校舎が倒壊します。災難続きの学校だったのです。

## 広がる教育

明治時代初期の酒田で最初に女子教育に力を注いだのは、女教師・小川宮子でした。三島県令に認められた小川は、女子生徒が通う松操学校（本町）で4年間教鞭を振り、明治11年（1878）に酒田を離れます。裁縫や礼儀作法を熱心に指導する姿は、酒田の女子教育に大きな影響を与えたといえます。

明治31年（1898）、酒田尋常高等小学校（改称した琢成学校）から分かれた「女子部」を元に、町立高等女学校が新設されます。学校に通う女性は比較的裕福な家の出身でした。当時は「女性は家を守る」という考えがあり、学校では学問のほか、家事・裁縫・茶道などを学び、良妻賢母となるための教育が徹底されました。明治33年（1900）には初の卒業生16名を送り出しました。明治35年（1902）に県に移管され今町に移転、生徒数も増えていきました。その後、県立酒田西高等学校と改称し、現在は男女共学になっています。



酒田高等女学校  
明治41年（1908）頃撮影

「幼稚園」も明治時代に登場します。青木マサ（生没年不詳）は幼児教育を重要視し、幼児を受け入れる青木幼稚遊戯園を明治36年（1903）に開園します。当初は20名ほどだった園児も、5年ほどで70名まで増えました。明治44年（1911）に酒田町長・池田藤八郎が運営を引き継ぎ、酒田幼稚園として現在も続いています。

## 流行や文化



女性を写した写真  
明治中期～後期撮影  
酒田町にあった写真館で撮影された肖像写真です。明治10年代から流行した「ショール（肩掛け）」を身に着けておしゃれをしています。  
明治期の酒田では着物姿が一般的で、洋装の女性が増えるのは大正時代に入ってからです。



エジソン蓄音機 明治中期  
明治10年（1877）、アメリカの発明家・エジソンは、円筒に巻き付けた錫箔に音を記録する「蓄音機」を発明します。この蓄音機は円筒状の「蠟管」を使用する初期型です。  
明治30年ごろの巡査の初任給が9円の時代、この蓄音機の値段は約50円と、簡単には買えない高級品でした。明治40年頃から国産化が進み、廉価になります。





映画館「港座」  
明治20年（1887）設立 大正期撮影

酒田に唯一残る映画館「港座」は、明治時代には演劇や浄瑠璃、講演会を開催していました。活動写真は明治30年代には全国で人気を博しており、セリフや場面解説を担当する「弁士」が活躍しました。

写真の立派な建物は「東北一の劇場」と呼ばれ親しまれましたが、昭和29年に火災で焼失しています。



新井田橋の上を走る自動車  
明治後期撮影

明治31年（1898）、日本に初めて自動車が輸入され、そのわずか4年後の明治35年（1902）、小林孫右衛門が初めて酒田で自動車を試乗※したとされています。明治44年（1911）9月には酒田と鶴岡を結ぶ乗り合いバスの営業が始まります。この写真はそのバスとされており、脇に立つ子供は珍しそうに見ています。

※小林孫右衛門が購入した自動車かは不明

右：幻灯機 明治41年（1908）購入

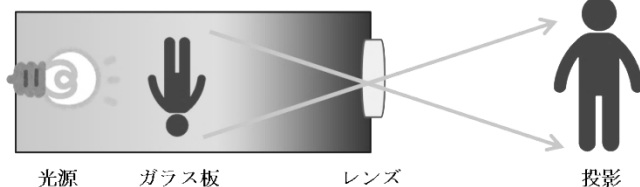
明治初期から日本に登場し、主に教育用として利用されました。珍しい動物や各地の名所が描かれたガラス板を差し込み、本体内部にあるランプを点灯すると、ガラス板の絵が壁に大きく映し出される仕組みです。

下：幻灯機用着色ガラス板 明治中期～後期頃

「種板」とも呼ばれ、風景画や写真、日露戦争などの場面、漫画絵が描かれています。幻灯機に上下さかさにセットして光源を点けると、下の図のように像がレンズを通り反転し、壁に大きく投影されます。



光を当てるとぼんやり像が映ります



像が映るしくみ

ガラス板は漫画や写真、風景など  
さまざまな図柄があります



## にぎやかな商店

「引き札」は、開店の案内や大売出しの宣伝用に使われた、商店が客に配るチラシです。当時の風俗や流行が反映されたデザインも多く、カラフルで派手な図案が目を引きまします。

ここに掲載した引き札は、酒田の商店で配布されたものです。七福神や宝船などのおめでたいモチーフ、人でにぎわう商店の図案が好まれ、日清・日露戦争後は軍隊や軍艦など、戦争勝利を祝う図案も使用されました。家の壁に貼る事を想定して暦（カレンダー）が書かれたものもあります。いくつかのチラシに書かれた「大勉強」は「値引きします」という意味です。



酒田港上中町 田中商店

酒田の田中商店で配られた引き札ですが、郵便配達員とポスト、電話、帆船に鉄道が描かれ、まさに文明開化を象徴するような絵柄になっています。



酒田港米屋町 丸谷庄治郎

正月の大売出しの図案で、男の子は軍帽を被り、女性と少女は流行のショールを身に着けています。店の名前は架空の「勉強商店」です。

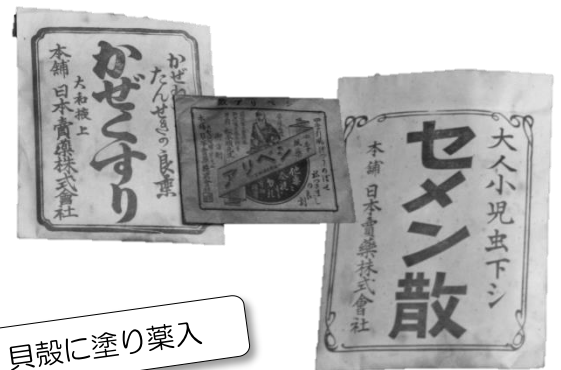


明治時代のお金

明治6年制定  
半銭銅貨

明治21年制定  
五銭白銅貨

明治30年制定  
一銭青銅貨



貝殻に塗り薬入



さまざまな薬 明治期

上下水道が整っていない時代、人々は感染症に悩まされていました。明治12年には酒田町でコレラが大流行し、多くの患者が亡くなっています。

展示品は薬局や「富山の薬売り」が販売、家庭に常備薬として置かれていたものです。井戸水を利用していた明治期、腹痛薬や虫下しは欠かせない薬だったのです。



車は便利だな～!

中川屋旅館前（秋田町） 明治後期～大正期撮影  
電話が開通した明治41年（1908）以降撮影された写真で、旅館の前には大きな自動車が停車しています。集まった人々は、当時まだ台数が少なかった自動車を珍しそうに見物しています。